

# 万葉集「立山賦」の「帯ばせる」景に関する 実景論的考察

藤 田 富士夫

## I. はじめに

天平19（747）年4月27日に越中国守・大伴家持が「立山賦」歌群（巻17・4000～4002）を詠じ、翌28日に掾・大伴池主が「敬和立山賦」歌群（巻17・4003～4005）を詠じた。『万葉集』での「立山」関連歌はこの2日間の唱和に集中している。これらは「立山」の名称に関する初出史料でもあり、全部で6首ある。

『万葉集』に見える「立山（たちやま）」（多知夜麻）を万葉学者や古代史家の間では、①富山県東部の立山連峰の総称、②大汝山（標高3015m）を主峰とし、雄山と富士ノ折立を加えたいわゆる立山三山を指す、③タチヤマは太刀山であり、太刀は劔へと通じるので今日の劔岳がかって立山であった、とする3説が主流となっている。これらの説は、いずれも万葉以降に定着した山名を基としての解釈である。

筆者は考古学に携わってきていて、常々このような場合には現地の景は第一等資料、地名や語呂合わせによる由緒、解説は第二等資料とする立場をとっている。その結果、①～③の説は例えていえば「地図と地形が違っていたら、どちらを採るか」といったことからの見直しが必要であると思われる。

筆者には、後代に命名された山岳名に基づいている（と思われる）①～③説を支えている論拠には、さしたるものがないと映る。言うまでもないが万葉史学から見た「立山」歌群検討の原典資料は「万葉集」以外にはない。それに従えば①、②、③の諸説は「歌詞が指し示す景」と「現地の景」の関係がでたらめである。加えて、諸説はことごとく奈良時代の人々が抱いていた山容観から越脱している。

筆者は『万葉集』の「立山（多知夜麻）」は、富山県魚津市域の南東にそびえる毛勝山（標高2414m）であると考えている。当該比定は早くに、川上正二氏が唱えたが<sup>(1)</sup>、異説扱いされ今日支持する万葉史学者はいない。このような異説を筆者が再考するのは、第一等資料が示すところに従った結果である。これまで何度か述べているので、ここでは再論しない。関心のある方は拙稿を参照いただきたい<sup>(2)</sup>。

筆者の姿勢は、まずは原典が指し示す現地に立ち、その上で不合理な点があるならば、その原因を探れば良いといったところにある。題目をやや格式張って「実景論的考察」としたが、要するに「現地に立って考える」ことである。このような基本的なことが万葉史

学者は苦手であるように思われる。今回は、「立山賦」の「帯ばせる」景をテーマとして、現地に立って見た。

## II. 「カムナビ」に「帯ばせる」川の景

大伴家持の「立山賦」に次のようなものがある<sup>(3)</sup>。

……皇神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる  
片貝川の…… (巻17・4000)

ここでは、「立山に帯ばせる片貝川」の景を論じるに際して、先ずは『万葉集』の「山」に帯ばせる「川」を詠んだ歌全5首の景を探っておきたい。なお集中の関係歌はすべてが「大和」地域だけに見られる。また『古今和歌集』にも1首がある。

### (1) 『万葉集』に見る「帯ばせる」景

ア. 三笠の山の景

○大君の 三笠の山の 帯にせる 細谷川の 音のさやけさ (巻7・1102)

「三笠の山」は、奈良・若草山に南接する「御蓋山」(297m)に比定されている(第1図)(写真1)。広域を成す春日山の一峰を指すが平野から望むと円錐形の山容を呈している。御蓋山に由来する河川は3本ある(第1図)。若草山との間に形成された開析谷から流れ出て東大寺旧境内を経て奈良女子大学辺りで佐保川と合流する吉城川、御蓋山を水源とし小さな谷筋から流出し猿沢池を経て佐保川へ合流する率川、春日山一帯を水源とし御蓋山の南麓を巻くようにして流れ高畑町で南西流して佐保川へと合流する能登川である。

「細谷川」は「帯にせる」河川なので、その形容に相応しいのは吉城川と能登川ということになる。一般的には能登川説が採られている<sup>(4)</sup>。

一方、春日大社宮司の花山院弘匡氏や奈良大学の上野誠氏は、吉城川上流の「水谷川」が「細谷川」だとする(写真2)。「水谷川」の水源に上水谷神社が祀られており、春日大社の「聖なる河」としての位置付けを有している。中流域に鎮座する水谷神社には磐座も見られる。「細谷川」とは地形を表わす普通名詞と見るなどの根拠をあげていて、興味深いものがある<sup>(5)</sup>。ここでは吉城川(上流の水谷川を主として)説を支持しておきたい<sup>(6)</sup>。

上野氏等の根拠に加えて、後述する『古今和歌集』にみえる吉備中山を詠んだ転歌と現地景が類似することをあげておきたい。いずれもV字状の谷あいから帯状を成して平野へ

と流れ出ている。

## イ. 三諸の神の景

○三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川 水脈し絶えずは 我忘れめや (巻9・1770)

『万葉集』の中で単独で「三諸」と表現されている場合には三輪山を指し、「三諸の神」とあれば「三輪山の神」のことで、『三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川』(1770)という表現は、川がとり囲む土地を擬人化した表現と考えられる」とされている<sup>(7)</sup>。

三諸に比定されている「三輪山」(469m)は、奈良県桜井市に所在し大神神社境内を成している(第2図)。神道考古学を提唱した大場磐雄氏が、『出雲国風土記』などの古典に見える神奈備13例中で、「古来最も顕われているのは三輪の神奈備すなわち三輪山である。大和平野の東辺にその秀麗な姿を示して、今も昔ながらの山そのものを御霊代としていたことは、あらためて説くまでもあるまい」と讚美し、その「典型的な笠状円錐形」の山容をもって「神奈備」研究上の標式としたことでも知られている<sup>(8)</sup>。大和平野との比高差は約360mを測り、この山域ではひと際目立っている。

かかる神奈備が帯ばせる「泊瀬川」は(写真3)、今日、国土地理院の地図「桜井25000分の1」で「大和川」(初瀬川)と表示されているものを指す。長谷寺の東北の奥域に発し深いV字状を成す谷あいを経て、<sup>とび</sup>外山地内で大和平野へと放たれる(写真4)と同時に三輪山の南西麓を巻くように北西へ斜流し、やがて佐保川へと合流する。ここでは、三輪山(神奈備)と初瀬川との関係が明瞭である。

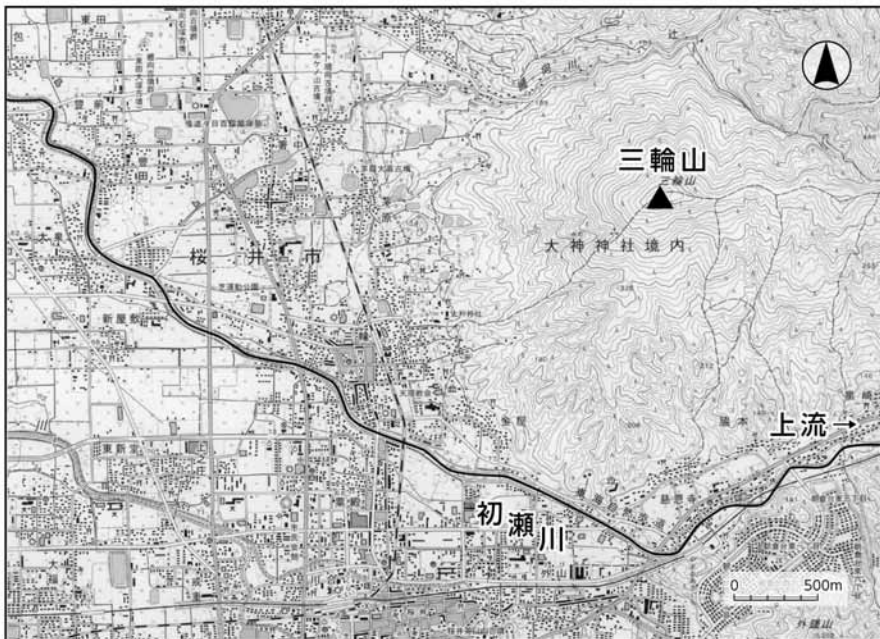
## ウ. 飛鳥の神奈備山の景

○葦原の 瑞穂の国に 手向すと 天降りましけむ 五百万 千万神の 神代より 言ひ継ぎ来たる 神奈備の 三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋行けば 紅にほふ 神奈備の 三諸の神の 帯にせる 明日香の川の 水脈速み 生しため難き 石枕 苔生すまでに 新た夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見えこそ 剣大刀 斎ひ祭れる 神にしまさば (巻13・3227)

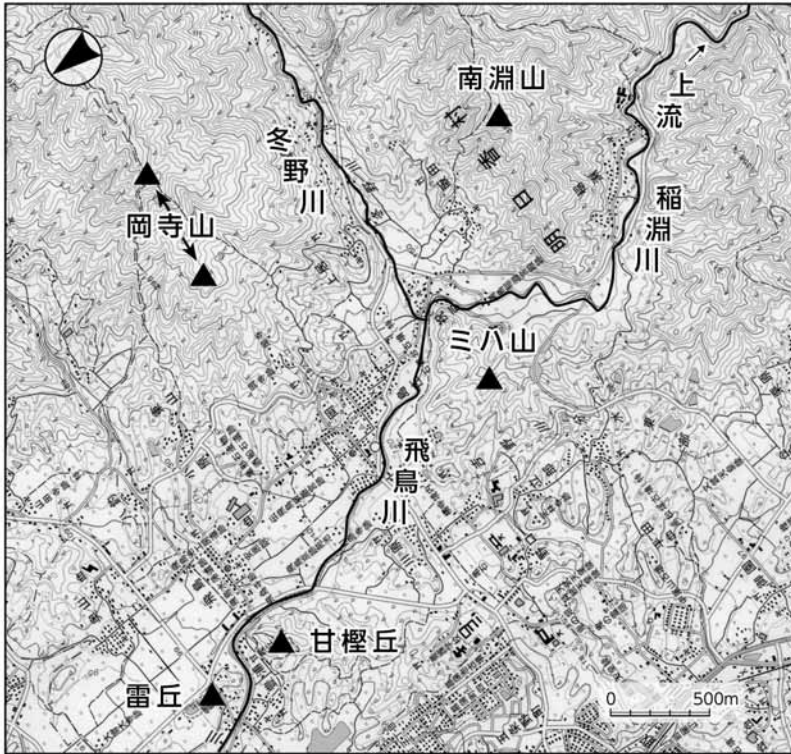
○春されば 花咲きををり 秋付けば 丹のほにもみつ 味酒を 神奈備山の 帯にせる明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うちなびく 心は寄りて 朝露の 消ぬべく 恋ひしくも 著くも逢へる 隠り妻かも (巻13・3266)



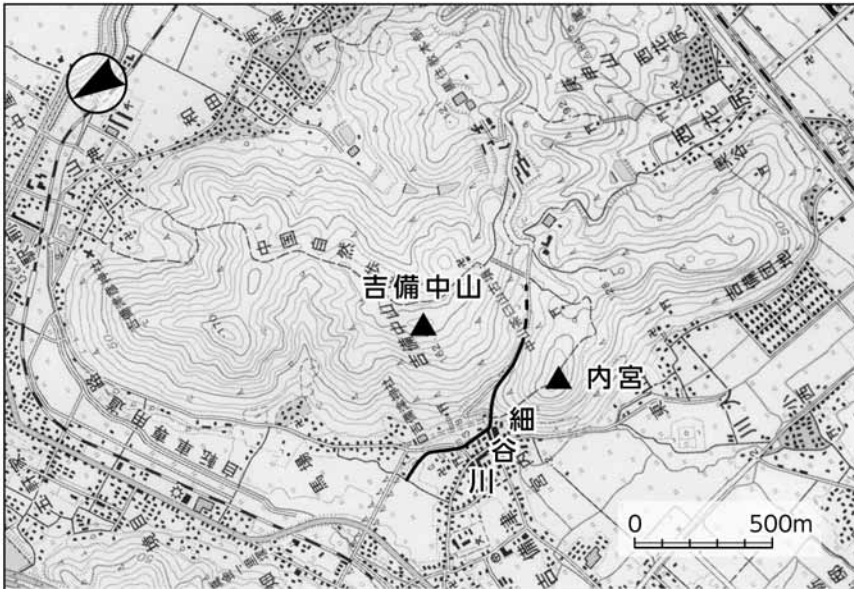
第1図 御蓋山を「帯ばせる」2つの川



第2図 三輪山を「帯ばせる」大和川(初瀬川)



第3図 飛鳥川が「帯はせる」神奈備山（諸説による）



第4図 吉備の中山を「帯はせる」細谷川

これらは「飛鳥のカムナビの神に対し飛鳥川をその帯に喩えた歌」である<sup>(9)</sup>。〔巻13・3227〕の「三諸」は、「カムナビ+ノ+ミモロ」とあるので、単独形で表現される場合の「三輪山」とは区別することができる。上野誠氏によれば、「ミモロ」と称されている場所は、大和国では飛鳥のカムナビ（6例）、三輪山（7例）、春日野（1例）と、山背国の鹿脊山（1例）があるとされる<sup>(10)</sup>。

筆者はこれまで、『万葉集』にも多出し、古都飛鳥を表象する「飛鳥のカムナビ」の現地比定は確定済と思い込んでいた。しかし実際には諸説あることが分かった（第3図）。現在、明日香村の鳥形山に飛鳥坐神社が鎮座している。『日本紀略』天長6年（829）3月10日条に「大和国高市郡賀美郷甘南備山の飛鳥社を同郡同郷鳥形山に遷す。神の託宣に依るなり」とあって鳥形山が平安朝以降のカムナビに比されたことが分かる。しかし、それ以前の万葉の時代の飛鳥のカムナビの位置は分からなくなっているのである。

上野誠氏が整理するところでは、近世以来の通説であり澤瀉久孝氏らが採る「雷丘説」<sup>(11)</sup>、折口信夫氏による「甘檜丘説」<sup>(12)</sup>がこれまで支持されてきたが、近年岸俊男氏の「ミハ山説」<sup>(13)</sup>、桜井満氏の「南淵山説」<sup>(14)</sup>が新たに提唱されているという（写真5～7）。このような中、岸氏のミハ山説を西宮一民氏が別の理由から支持したことから<sup>(15)</sup>、諸注釈の大勢はミハ山説に傾きつつあるが、反論もあって「必ずしもこの問題に決着がついたわけではない」とされている<sup>(16)</sup>。

いずれの説であれ筆者が当面知りたい「神奈備山」と「明日香の川」の関係性を推測することはできる。飛鳥川は、高取山系に水源を有し、栢森、稲淵の谷あいを通る「稲淵川」が、祝戸地区で多武峰山系を源流とする「冬野川（細川）」（写真7）と合流し河川の風情を整えて、橘（橘寺のある所）や川原（川原寺のある所）辺りで開けた平地へと流れ出る（写真8）。明日香村を北西流し、やがて大和川（初瀬川）へと注ぐ。今、話題にしている明日香の地では、今日まで流路の著しい変容はなかったと推測される。

これまで見てきた、「三笠の山」や「三諸の神」の景を参照にすれば、飛鳥川がV字状の谷から平地へと流れ出る辺りの景に「飛鳥のカムナビ」を解くヒントがあるように思われる。ここでは、さしあたって飛鳥川（明日香の川）の流路と山系（神奈備山）の関係を“雰囲気”で捉えておきたい<sup>(17)</sup>。

## （2）古今和歌集に見る「帯にせる」景

『古今和歌集』（913年頃成立）に次の1首が見える<sup>(18)</sup>。

○真金ふく 吉備の中山 帯にせる 細谷川の おとのさやけさ（巻20・1082）

## この歌は、承和の御嘗の吉備国の歌

巻20「神遊びの歌」に収載されているもので、『万葉集』（巻7・1102）を転じたものである。歌作時期は、仁明天皇の時の年号「承和」とあることから834～848年と特定できる。「吉備の中山」は、通説では岡山市北区の吉備津神社の背後の山に比定されている。

かつての備前国と備中国の境に位置する独立丘（標高175m）であり、北東麓には備前一宮である吉備津彦神社が鎮座する。また北西麓には備中一宮である吉備津神社が鎮座し吉備地域の総氏神として崇敬されている。「細谷川」は、吉備津神社の摂社である「本宮社」の前を流れる小川に早くから比定されており（第4図）、境内には弘化3年（1846）の銘をもつ「吉備中山細谷川古跡」と記した大きな石碑が建っている。山塊の急峻な斜面を刻んだ川の幅は10mにも満たずその名の通り細い流れである。筆者が訪れた2012年4月4日の川底には、水流はほとんどなかった。一方、本宮社対岸の「瀧祭宮」からは白糸の清水が崖面を伝って細谷川へと注いでいた。これらを源流とする細谷川は旧社務所前を通り宮内集落を経て吉備津神社前の神池（御手洗池）へと注いでいた（写真9）。

参道から細谷川を眺めると、吉備中山（標高162m）と南接する山稜（標高約129m・ここでは仮称「内宮山」とする）の間の急峻なV字谷から流れ出ているのが良く分かる（写真10）。吉備中山は神社が奉じる「御神山」であり、また清少納言が『枕草子』で「山は」と題して、「小倉山、三笠山、三輪の山、耳なし山、妹背山」などとともに「吉備の中山」と記すように平安朝にはすでに名山として知られていた<sup>(19)</sup>。「内宮山」の頂には、かつて吉備津神社の摂社内宮社が鎮座していた。徳川初期とされる「吉備津神社社領古図」に「内宮」の記述が認められる。内宮には「大吉備津彦命の妃である百田弓矢比売を祀っていた。しかし明治の末、内宮社も麓の本宮社に合祀したので、建物もたおされ、わずかに今は礎石ばかりが残るだけである」とされている<sup>(20)</sup>。摂社には本宮にとって縁故の深い神が祀られている。この山稜が吉備津神社の信仰と深く関わっていることを示している。その姿形は、三角形を呈しており大場磐雄氏が説く「神奈備式霊山」の威容を成している<sup>(21)</sup>。細谷川の本流が枯渇している状態にあって、本山稜側に設けられた「瀧祭宮」から流れ出る清水が印象的であり、「神奈備式霊山」と細谷川との密接な関係がうかがえる。

なぜ当地で『万葉集』（巻7・1102）を転じた歌が詠まれたのかについてこれまで謎とされてきた。吉備中山はドーム形で、「内宮山」は三角形の山容を呈する。その谷間から「細谷川」が流れ出ている。その構図は、奈良・若草山と御笠山の景と重なる（写真1・10）。『古今和歌集』の本歌は、奈良のその情景を周知した歌人の作に違いないであろう。少なくとも本歌が生まれた9世紀中ごろまでは、奈良・三笠山を細谷川（今日の水谷川と

吉城川)が「帯ばせる」景として認識されていたことが景の類似からもうかがえる。

### (3) 古代人の「帯ばせる」景の観念

ここで見た『万葉集』、『古今和歌集』の「帯ばせる」景は、ほぼ現地比定が出来ているものである。飛鳥のカムナビについてはやや不安定ではあるが、飛鳥川の上流域のいずれかの山塊に比定できるのは間違いない。いずれにしる明日香の範囲で、平野から遙拝できるものを指すであろう。

これらのカムナビと河川が織りなす景は、象徴となる「神奈備」や「神奈備式靈山」から発した水流が谷懐を縫って、V字状の谷口から平野へ一線を成して流れ出てくるものである。平野へ流れ出た河川は、これら聖なる山裾に沿って巡り、あるいは斜行して平野へと放たれる。それは、あたかも帯解の様子さえ思わせる。このような景は、『万葉集』では大和を代表するカムナビだけが「帯ばせる」のであって、いずれも実景描写を伴っている。古代人の「帯ばせる」景の観念は、このようなものであることを認識する必要がある。

かかる景を万葉学では、「明日香川や細谷川などの川が山裾を巡りながら流れているさまを『帯にせる』と歌うもので、神聖な山を擬人化し、川を帯に見立てている。またそれは、神の降臨する山の麓から、その靈威を人里に伝えるための川である、という信仰に基づく表現だとする見解もある」と解説している<sup>(22)</sup>。「立山賦」の「帯ばせる」景も、これらが示す体系の中で理解し、論じられなくてはならない。

### III. 「立山賦」の「帯ばせる」景

○立山の賦一首 并せて短歌 この立山は新川郡にあり

天離る 鄙に名かかず 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも  
さには行けども 皇神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷き  
て 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに たつ霧の 思ひ過ぎめや あり通ひ  
いや年のはに 外のみも 振り放け見つつ 万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも  
告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね (巻17・4000)

○立山に 降り置ける雪を 常夏に 見れども 飽かず 神からならし (巻17・4001)

○片貝の 川の瀬清く 行く水の 絶ゆることなく あり通ひ見む (巻17・4002)

四月二十七日に、大伴宿禰家持作る。

敬みて立山の賦に和ふる一首并せて二絶

○朝日さし そがいひに見ゆる 神ながら み名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け



天そそり 高き立山 冬夏と 別くこともなく 白たへに 雪は降り置きて 古ゆ あり  
来にければ こそしかも 岩の神さび たまきはる 幾代経にけむ 立ちて居て みれど  
も異し 峰高み 谷を深みと 落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り 夕されば  
雲居たなびき 雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思い過ぎさず 行く水の 音もさや  
けく 万代に 言ひ継ぎ行かむ 川し絶えずは (巻17・4003)

○立山に 降り置ける雪の 常夏に 消ずて渡るは 神ながらとそ (巻17・4004)

○落ち激つ 片貝川の 絶えぬごと 今見る人も 止まず通はむ (巻17・4005)

右、掾大伴宿禰池主和へたり。四月二十八日

これら一連の「立山」歌は、下線に示したように「片貝川」を土壌とした風土の中で詠まれている。『万葉集』すなわち「原典」に従う限り、そこでの「立山」は「片貝川」と一体の景の中でのみ論じることができるのである(第5図)(写真11)。

これらの歌群について伊藤博氏は、池主の「反歌は、第一首は(筆者注…家持の)長歌前半の山に、第二首は長歌後半の水に依っているものと見られる。が、と同時に第一首は家持の「山」の反歌第一首を承け、「和の歌として、総体的によく考えられ、見事に結ばれているといえよう」としている<sup>(23)</sup>。

また奥村和美氏は、家持の「立山賦」は山部赤人の不尽山歌と登神岳歌の表現を踏襲したものであり、池主の「敬和立山賦」はそのことを完全に把握して詠まれているとする。「このとき家持と池主が現在『万葉集』巻三として残るものと同じものを所持していたのか、それともその原形というべき資料的なものを所持していたのか定かではないが、すでに編纂されてあった一定の作品群の中から赤人歌を選択しようとする態度を家持と池主に見出すことができる」とし、歌群が周到に練り上げられた中で誕生したことを説いている<sup>(24)</sup>。

そのような創作事情を有する4000、4002、4005番の3首中に「片貝川」が見えるのである。後述するが、家持や池主が河川名を取り違えたことを匂わす注釈もあるが、国守が河川名を取り違えるはずもないし、十分に準備された歌作状況を踏まえるとその可能性はまったく無い。

また4003番の「落ち激つ 清き河内に」、「行く水の 音もさやけく」、「川し絶えずは」の“川”は、家持の「片貝川」に対する敬和であるので、当然、それは「片貝川」を表意している。

これらが指し示しているのは、歌詞どおりの「立山」と「片貝川」なのである。先述したように「立山」の比定には諸説ある。ただし「片貝川」に関しては異説がない。まずは、ここから出発すべきである。この河川は「立山連峰の北部、毛勝山(高さ二四一四メートル)に発し、片貝谷を西北流して、富山県魚津市の北部で富山湾に注ぐ」ものであ



る<sup>(25)</sup>。流長約27kmで、「本邦屈指の急流で平均勾配は85%」とされている<sup>(26)</sup>。

かかる片貝川辺に立って、南東にそびえる立山連峰を仰げば、正面に見えるのは僧ヶ岳と毛勝山だけである（写真13）。もちろん現在の流路は古来そのものではない。けれども片貝川の流域のどこから見てもその景は変わらない。それは深いV字状を成す片貝谷の谷口から平野へ一本の帯となって流れ出ている。この片貝川が大地に刻みこんだ流水線は、筆者が「立山」に比定する毛勝山（2414m）からのものである。片貝川はその「立山」に「帯ばせる」景として存している（写真11・12）。その様相は、大和や吉備地域における「カムナビ」と「川」の実景と比較して、まったく違和感が無い。毛勝山と僧ヶ岳、御蓋山と若草山、吉備中山と内宮山といった三角形を成すカムナビと笠型を成した円形の山容の組み合わせの景までもが類似している。「片貝川」が帯ばせているのは「毛勝山」以外にはない。

#### IV. 苦慮する「帯」ばせない「立山」説

##### (1) 河川名の取り違い論

地理感の疎い方の為に記しておくが、「はじめに」で記した諸説が説く、今日の「立山」（雄山・大汝山・富士ノ折立＝立山三山ともいう）や「劔岳」は片貝川流域からは見えない。それらは「片貝川」とは異なる河川を「帯」にしている（第6図）。否、正しくは本稿「II.『カムナビ』に『帯ばせる』川の景」で確かめたような景を成していない。

「いわゆる立山三山」は、「常願寺川を帯にしている」と仮定してみよう。その場合、河口が平野に流れ出るのは立山町の上滝地内であり、この地点から「立山」は遙か遠くにあって他山の「帯」である（写真14）。

次に「劔岳」は、「早月川を帯にしている」と仮定してみよう。この場合にあっては先ずは正面観を成す大日岳、そして奥まって見える劔岳、毛勝山それぞれが「帯」の権利を有していて、劔岳に特化できない（写真15）。それは皆が共有している「帯」である。早月川の「帯」を劔岳が占有できるのは河口から17kmも遡った上市町の伊折まで行かなくてはならない。家持や池主が、そこまで足を延ばしたというのは現実的でない。仮に、「立山」が劔岳であるとすれば、「帯ばせる」河川は劔岳を正面に見据える、上市町と滑川市の間を流れる「郷川」や上市町を貫流する「上市川」の方が相応しい。

突如として、ここに仮定の話を書き、ここでは不要と思われる「帯」の景の写真まで掲載した。識者には「原典」を離れた遊びと映るかもしれない。けれども万葉史学者の大半は、このような仮定を念頭に置いて（「無意識」と思いたいが）、あるいは「帯ばせる」を等閑視して研究を進めている現状がある。

具体的に指摘しておこう。『新編日本古典文学全集』の頭注に「立山賦」を、「劔岳（二九九八<sup>ママ</sup>

メートル)を中心として立山を詠んだとすれば、それ(筆者注・片貝川)より西を流れる延はひつき槻川のほうがふさわしい」とある。なぜ、書かなくとも良い注をしたためたのだろうか。「はじめに」で記した③説〔劔岳〕を念頭に置いて、家持が実際は「早月川」なのに「片貝川」と河川名を取り違えたことを匂わしていると思われる<sup>(27)</sup>。根拠がない限り(かかる頭注程度のものは「根拠」とはならない)原典の勝手な読みかえは許されない。もし、それを可とするならば変幻自在論となり、どのような立論も可能となる。

黒川総三氏は、立山賦と敬和立山賦に「計六首の立山の歌があり、ともに片貝川が詠みこまれている。これについて片貝川は常願寺川である。他に大川があるのに片貝川がとりあげてあるのはおかしいなどと古来異論が多い」と、河川取り違い論が実際に取沙汰されていることに触れている<sup>(28)</sup>。

これら「河川名の取り違い論」について成立の余地のないことは、先に奥村和美氏の研究を踏まえた中でも述べたところである。

## (2) 雄姿が仰げるはずの論

富山大学教授で故・坂井誠一が記すところを見ておこう。坂井はタチヤマの劔岳説を支持し、「家持が駒を駐めた片貝川のほとりからは、劔岳の雄姿は仰げるが、立山(雄山)は見えない。したがって、家持のみたタチ山は明白に劔岳であった」と書いている<sup>(29)</sup>。

これは明らかな失当である。確かに、片貝川のほとりからは人口に膾炙している立山(雄山)はまったく見えないので、この箇所の記事は正しい。しかしながら「劔岳の雄姿」は仰げない。厳密さから言えば、頂きの一部は少しだけ仰げる。どの程度仰げるかは、現地に立てば直ぐにわかる(写真13)。劔岳は他山に埋没していて「雄姿」は見えない。予備知識の無い者の「視覚野」では認識出来ない。「心眼」レベルの話である。この頂きを家持が見て「立山」を詠んだとは到底思えない。もちろん片貝川の流路が今日と異なっていた可能性は大きい。このことを100%考慮したとしても魚津市の東半域を流れる片貝川流域では、どこにあっても劔岳の雄姿は見えない。坂井の場合では、前提が誤っているのに「劔岳」が導き出されている。最初に答えありきの感がする。

## (3) 聖地「立山」の拡大解釈論

広島女学院大学教授の森斌氏は、大伴家持が詠んだ越中の山川を「山川異域」と理解している。森氏は、「雪の立山と清明なる片貝川の瀬で越中吉野たる立山山川の誕生が試みられていたのである」とする。この部分については歌論から導かれたもので、教えられるところがある<sup>(30)</sup>。一方で、森氏は純粋に「立山」を現代の雄山(=立山三山)に比定したことから、その間の距離(中流域まで)が約30kmもある片貝川が詠まれていることの

解釈に苦慮している。

本文で立山連峰の「山麓の広大さと言う視点からは、北のはずれにある片貝川が相応しいものだったろう」とし、論考の結びに「家持歌の地域的な大きさは、片貝川の登場で立山連峰の北に位置する地域にまで拡大していることで理解される。…（著者略）…、片貝川という北のはずれの川をうたうことで聖地立山が最大限に広がったとっていい」と説いている。森氏は、真摯に歌が詠まれた舞台と向き合っておられるが、結論は採ることが出来ない。立山三山は片貝川をまったく「帯」にしていないからである。

折角に、片貝川の地を「越中吉野」と、ピンポイントで指摘しながら、立山連峰全体へと視点が拡大したことで「立山の賦」がテーマとする「山」と「川」の対偶法の意義がぼやけてしまった。要するに本歌は拡大解釈論では詠み込めないのである。

ここで筆者の拙考を付言しておきたい。「片貝川」がなぜ詠われたのであろうかといった点についてである。「立山賦」の研究で、しばしば片貝川は「聖なる川」に比される。

カムナビとしての「立山」（毛勝山）を帯にしていることや、朝夕に霧が立つなど、様々な考察がなされてきている。それに加えて片貝川自身の属性をあげておきたい。

家持は「片貝川の 清き瀬に」「行く水の 音もさやけく」（4000）、「片貝の 川の瀬清く」（4002）と詠み、池主が「落ち激つ 清き河内に」（4003）、「落ち激つ 片貝川の」と敬和している。これは片貝川の土地褒めであるが、褒められるには理由があるはずである。

万葉時代の「清き瀬」で求められるのは「川音」があることである<sup>(31)</sup>。それらは川原を構成する岩石や砂粒によって生み出される。片貝川は本邦屈指の急流河川であり、加えて河川の大小礫石が豊富である。急流河川は、重い礫石を持ち上げ浮かべて流す。礫石は角が擦れて丸くなっている。本河川は釣りファンには透明な水、白い石、速い流れを特色とする「フリー・ストーンの川」として良く知られている。白い石は隣の早月川でも見られる。両河川の「白い石」の景は、富山県内のどの河川よりも際だっている（写真16）。それは花崗岩によるものである。「片貝川の奥平沢付近から、通称片貝川花崗岩類と呼ばれるピンク色の花崗岩がのぞき始める。これより南へ十数キロ早月川の中村まで伸びている。片貝川や早月川の川原が白っぽく見えるのはこの花崗岩が多いためである」とされている<sup>(32)</sup>。白い石は「川の瀬」の清らかさ保証するものであったに違いない。ちなみに家持や池主の故郷である大和地域にはかかる白い石を散りばめた河原は皆無である。

## V. おわりに

ここに、「立山の賦」の「帯ばせる」景について、『万葉集』などの関連歌が示す実景の中での検討を行った。それは、毛勝山を家持時代の「立山」とすることで、「帯ばせる



写真1 若草山(左)から見た御蓋山の景  
(間を水谷川が流れる)



写真2 水谷川の景 (右側が御蓋山の山裾)



写真3 大和川と三輪山の景 (栗殿地内)



写真4 谷間から流れ出る初瀬川  
(脇本地内)



写真5 飛鳥川とミハ山 (右手山頂) の景



写真6 飛鳥川と甘樫丘の景



写真7 冬野川 (細川) と南淵山 (右側の山手) の景



写真8 飛鳥川と多武峰 (左側) 山系の景  
(橋地内)



写真9 細谷川の景 (旧社務所前)



写真10 吉備中山(左)とその南の「内宮」山(右)



写真11 片貝川と「立山」(毛勝山)の景 (東山地内)



写真12 片貝谷から流れ出る片貝川 (東山地内)



写真13 片貝川下流から見た山岳の景 (左・僧ヶ岳、右・毛勝山)



写真14 常願寺川と立山連峰の景(上滝地内) —立山三山は左手写真枠外にあり—



写真15 片貝川と立山連峰の景 (滑川市栗山地内)



写真16 片貝川の川原の様子 (持光寺地内)

片貝川」の景が、こじつけの操作をしなくとも無理なく理解できることを示していた。かかる指摘を早くに成したのは市井の研究者で毛勝山を日々仰いで育った川上正二氏であった。歌詞そのものに従い、片貝川の源流を探り、明瞭に「片貝川が帯ばせる山は毛勝山である」と説いた<sup>(33)</sup>。卓見であった。けれども、それは立山連峰説や劔岳説を支持する廣瀬誠氏による重箱の隅をつつくような厳しい批判にあい、「学問的常識を踏み出した勇み足も多々ある」として、異説の域に退けられた。広瀬氏は片貝川が詠まれた背景について「他の諸大川をさし置いて片貝川を持ち出した理由は、海沿ひの北陸道が立山山脈の末端と最も接近するのが実に片貝川付近だからである」、「片貝河口から望めば、立山山脈の峯々はその水源に立ちはだかつて縦に重なって見え、いかにもこの地点こそ立山の山口といふ印象が強い」、「登る場合には常願寺川筋が重要になってくるが、登山風習のなかった当時としては、片貝川こそ「立山の帯ばせる川」として最適の条件を具備してゐたのである」としている<sup>(34)</sup>。森斌氏の聖地「立山」の拡大解釈論の先行論を思わせるものであるが先述したように、「帯ばせる」景の合理的説明とはなっていない。

拙稿は、かかる川上氏の着想を別の視角から再考したものである。おそらくは万葉史学者からは異説の類として一線を画されるものとなるであろう。けだし筆者には、だれがもっとも的確に眼前の景と向き合っていたのかということが分かっただけで充分である。

さて、奥村和美氏は、家持の「立山賦」は立山を神奈備山の一種と捉えていたとし、敬和した池主もかかる家持の視点を十分に理解していたと説いている<sup>(35)</sup>。「立山」を理解する上で重要な視点である。方法論的に「立山」は、カムナビである三諸山や三笠山そして飛鳥の神奈備山と同じ視点で理解されなくてはならない。ここで見たように、「カムナビ」はその土地にあって明確な存在として在る。「帯」はそのカムナビから発していることが明確であり、帯の解き口はV字谷から平野への出口にある。ここに、これまで茫漠としていた「立山」は、このような大和のカムナビの典型の景そのもので立ち顕れてきた。

これまで、「立山」の「帯ばせる」景の理解は一人、集中で浮いていたように思われる。どの注釈書を見ても、実感として迫る訳文は無いし、「帯ばせる」の訳を〈誤魔化して〉飛ばしている普及書も見かけた。「立山賦」と「敬和立山賦」の舞台が正確に反映していないことが大きな原因である。原典を離れて、ときには“『万葉集』は文学である”からと〈逃げを打ち〉変幻自在に論じられてもきた。けだし『万葉集』は文学であると同時に風土や地域に根差した歴史資料でもある。原典に従い—資料批判は欠かせないが—、それが歌われた舞台や大地からの実景論的検討が欠かせない。

拙論が、従来の「立山賦」や「敬和立山賦」の山岳比定や舞台について再考をうながし、より深い検討が成される契機となれば幸いである。なお、筆者は考古学を専攻する者である。そのため先行研究への誤解や基本的文献の遺漏など多くの不備があるものと思わ



れる。それらについて識者のご教示やご批判を頂ければ幸いである。また、図版などの作成にあたって畏友・中村年昭氏のご協力を頂いた。御礼申しあげたい。

## 註

- (1) 川上正二『家持の立山の賦 北陸の古代を探る』富山出版社 1982年, 37～58頁
- (2) 藤田富士夫「越中時代の大神家持の歌とその環境」『第18回春日井シンポジウム2010年「万葉集」に歴史を読む』春日井市・春日井市教育委員会・春日井シンポジウム実行委員会 2010年, 1～15頁、同「大神家持の春巡行と立山の景」『万葉古代学研究所年報』第9号 万葉古代学研究所 2011年, 217～233頁、同「万葉集「敬和立山賦」の「そがひ」に関する実景論的考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.10 敬和学園大学 2012年, 125～143頁
- (3) 『万葉集』の引用は次の図書に依った。小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集9 萬葉集④』小学館 2006年, 205～208頁。以下、本稿引用の『万葉集』は同全集7～9を用いた。
- (4) 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎校注『新潮日本古典集成 萬葉集二』新潮社 1978年, 194頁頭注。小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年, 195頁頭注。多田一臣訳注『万葉集全解3 卷第七 卷第八 卷第九』筑摩書房 2009年, 29頁脚注など。
- (5) 花山院弘匡「第四六八回 三月七日放送 大君の…」『NHK日めくり万葉集』vol.24 講談社 2012年, 25～27頁。上野誠『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼』雄山閣 1997年, 69～76頁。
- (6) 上野誠氏は、「三笠山が古代において『カムナビ』と呼称されたと確認できる資料はないが、神道考古学者の大場磐雄が説く「『カムナビ型』の信仰をもった山である、と考えることはできるであろう」としている(註5・上野, 72頁)。それに従いたい。
- (7) 註5・上野, 71頁
- (8) 大場磐雄『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』角川書店 1978年, 19～21頁
- (9) 註5・上野, 71～72頁
- (10) 上野誠「みもろ(三諸)」『万葉ことば辞典』大和書房 2001年, 374～375頁
- (11) 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十三』中央公論社 1969年版, 23頁
- (12) 折口信夫「かみをか〔神岳〕」『折口信夫全集 第六卷 萬葉集辭典』中央公論社 1966年, 120～121頁
- (13) 岸俊男『宮都と木簡』吉川弘文館, 1977年, 199～204頁。同「古道と宮都」『日本古代史の謎再考』学生社 1994年版, 156頁
- (14) 桜井満『万葉集の民俗学的研究』おうふう 1995年, 404～410頁
- (15) 西宮一民『上代の和歌と言語』和泉書院 1991年, 125～157頁
- (16) 註5・上野, 53頁
- (17) 本稿では紹介できなかったが他に主なものとして伊藤高雄氏による岡寺山(339.5m)説(伊藤隆雄「岡・島ノ庄」『飛鳥の祭りと伝承』桜楓社 1989年, 148～149頁)や、黒崎直氏による岡寺山(標高460m)説(黒崎直『日本史リブレット71 飛鳥の宮と寺』山川出版社 2007年, 72頁)がある。筆者は、これらの説(とりわけ伊藤説)に関心をもっている。それに従えば、「明日香川」が「帯ばせる」景は他説より鮮明なものとなる。今後、現地景などの整理を行った上で論じてみたい。
- (18) 『古今和歌集』の引用は次の図書に依った。奥村恆哉校注『新潮日本古典集成 古今和歌集』

- 新潮社 1989年, 368頁
- (19) 松尾聰、永井和子校注・訳者『日本古典文学全集11 枕草子』小学館 1974年, 81～82頁
  - (20) 藤井駿『岡山文庫52 吉備津神社』日本文教出版株式会社 2008年版, 28・99頁
  - (21) 註8, 21～22頁
  - (22) 野口恵子「おび(おひ)」『万葉ことば辞典』大和書房 2001年, 113頁
  - (23) 伊藤博『萬葉集釋注九』集英社文庫ヘリテージシリーズ, 2005年, 247頁
  - (24) 奥村和美「家持の「立山賦」と池主の「敬和」について」『萬葉集研究』第32集 塙書房 2011年, 163～197頁
  - (25) 小野寛編著『大伴家持大事典』笠間書院 2010年, 469頁
  - (26) 坂井誠一ほか『角川日本地名大辞典16 富山県』角川書店 1979年, 237頁
  - (27) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年, 206頁
  - (28) 黒川総三「立山と片貝川」『越中の万葉』北日本新聞社 1971年, 234頁
  - (29) 坂井誠一「Ⅶ 立山連峰の歴史」『立山連峰』文部省登山研修所 1981年三版, 109頁
  - (30) 森斌『万葉歌人大伴家持の表現』溪水社, 2010年, 178～197頁
  - (31) 上野誠「川の音を聞きながら」『NHK日めくり万葉集』vol.24 講談社, 2012年, 27頁
  - (32) 大野康太郎「第一章 片貝の地形と地質」『片貝郷土史』魚津市立片貝公民館 1997年, 21～22頁
  - (33) 註1, 42～45頁
  - (34) 廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房 1984年, 478～479頁
  - (35) 註24, 170～171頁